

# 立原道造 未完の夢 ヒアシンスハウス



加藤 良一 2023年10月31日

昭和初期に活躍した立原道造(1914-1939)は、合唱の世界では名の知れた詩人だが、同時に建築家でもあったことをわたくしが知ったのはそんなに古いことではない。立原の詩はいくつかの合唱曲となっていて、いまでもよく演奏される。なかでも木下牧子の作曲による「夢みたものは」はひととき好まれる代表的な曲だろうか。(詩の原題は「夢みたものは……」である)

## XX 詩人・立原道造 XX

立原道造は結核を患い、24歳という若さで亡くなったが、亡くなる数年前から勤務先の女性と清い交際を続けていた。昭和12年(1937)のある日曜日、立原とその女性は、軽井沢へ日帰りの小旅行へ出かけた。信濃追分駅近くの草むらで、道造はプロポーズをした。翌年、立原は愛する女性との幸せな時間を一篇の詩にしたためた。その詩が自身の理想を描きだした「夢みたものは……」であった。

夢みたものは……  
 夢みたものは ひとつの幸福  
 ねがったものは ひとつの愛  
 山なみのあちらにも しずかな村がある  
 明るい日曜日の 青い空がある  
 (略)



立原にとって心安らぐ世界、そこになくはならないのが、静かな村であり、明るい休日であり、なにげない日常であつたらう。輪になって踊る天使たち、青い空と青い小鳥などの中心には愛する女性がいて、愛、幸福、夢、願い、それらのすべてがあつた。

「詩と思想」(2023年7月)の特集〔抒情詩の学び〕で四季派の詩人、萩原朔太郎、室生犀星、佐藤春夫、田中冬二、三好達治、伊藤整、神保光太郎、伊東静雄、中原中也、津村信夫、などと並んで立原道造が紹介されていた。

### のちのおもひに

夢はいつもかへって行つた  
山の麓のさびしい村に  
水引草に風が立ち  
草ひばりのうたいひやまない  
しずまりかへつた午さがりの林道を

(略)

夢は そのさきには もうゆかない

(略)

夢は 真冬の追憶のうちに凍るであらう  
そして それは戸をあけて 寂寥<sup>せきりょう</sup>のなかに  
星くづにてらされた道を過ぎ去るであらう



この詩はどこかもの寂しく、立原に死の予感のようなものがあつたのではないかと思わずにはいられない。晩年は、といつてもまだ二十歳<sup>はたち</sup>過ぎであつたが、盛岡や九州に立て続けに旅行をしているのも、何かしら感じるころがあつたのだろうか。

### ❖ 建築家・立原道造 ❖

岡村民夫氏の著書「立原道造—故郷を建てる詩人」によれば、立原の建築に関連する著述は、「建築衛生学と建築装飾意匠に就いての小さい感想」、「住宅・エッセイ」、そして「方法論」がある。いずれも、昭和11年(1936)、東京帝国大学工学部建築学科在籍のときに書かれたもので、「方法論」は、卒業論文として建築学科に提出されている。さらに、岡村氏は、立原の人物像を次のように評している。

立原道造が詩人であり、かつ建築家であつたことは、本当に驚くべきことだと思う。近代の「言葉と物」のあいだで稀有なイロニーを生きた、といつても過言ではあるまい。

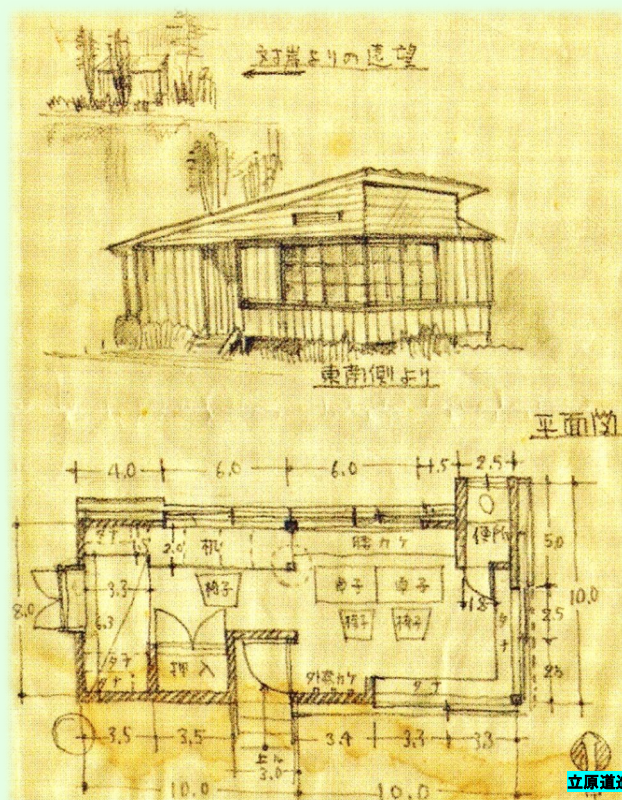
1936(昭和11)年春、東京帝国大学工学部建築学科の最終学年に進級した立原は、詩友への手紙に書いた——「これ〔建築家〕は僕の半身です。僕の分身は、かうして日夜、ひとりの僕が文学の道に生きてゐるとき、同じ熱情で、建築の道に生きてゐます」。そして彼は、この年の暮れ、建築と文学との関係を根源的に省察した卒業論文を大学に提出し、卒業後、建築事務所に入った。はたして彼以外にこんな人物がかつていただろうか。

立原は夭逝してしまったため、残された建築物は極めて少なく、建築家としての力量は把握しがたいという。立原没後、彼を研究してきたのはもっぱら文学の専門家であり、建築学との接点を十分に論じられてきていないのではないかと岡村氏はいう。また、立原のなかで、建築家と詩人がどのようにして両立していたのか、建築事務所と同僚によると、その問いに対する立原の答えはつぎのようなものだったという。

「何故詩と建築が同じにあり得るのか」。私が嘗て彼にこう問ふた時に、彼は「別々の作用を持ちながら手と足とが一つの身体にあるのと同じだ」と答へたやうに、彼にとってこの二つの異質の作用は少しも矛盾なく極めて高い一体に融合した能力として持ち合はされてゐた。この稀有なる脈絡の秘密が先づ私達を彼の内側へと誘ふのである。

### 立原道造が夢みたヒアジンスハウス

立原道造没後65年を経た2004年、埼玉県浦和市の別所沼公園<sup>べっしょぬま</sup>ほりに5坪ほどの小さな建物が建てられた。それは、道造自身がスケッチを画いた別荘で、「風信子<sup>ひあしんす</sup>ハウス」と添え書きがつけられていた。今は「ヒアジンスハウス」(HAUS HYAZINTH)と名付けられている。

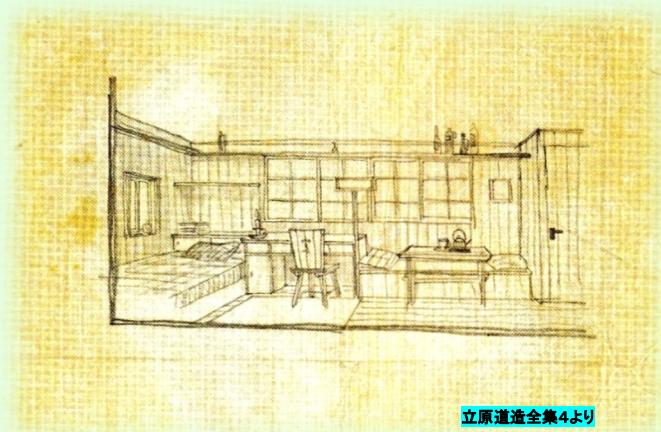


立原道造全集4より



立原は文学仲間と夏に軽井沢で過ごすことが多く、東京日本橋で生まれ育ち、当時もそこで生活していた彼にとって、浦和の地はその往復の途上にあり、友人で詩人の神保光太郎が住んでいたところでもあった。週末を過ごすには好都合の場所だった。「ヒアシンスハウス」は、立原の隠れ家のようなものだったといわれている。

現在、別所沼の周辺は約8万平方メートルの別所沼公園として整備されている。公園北部には大掛かりな遊具を備えた児童広場があり、多くの子ども達でにぎわっている。かつてはウナギも棲息していたことがあり、江戸時代には浦和宿の名物として知られていた。最寄り駅はその昔は浦和駅だったが、あらたに埼京線ができてからは中浦和駅がもっとも近い。



立原道造全集4より

別所沼公園から武蔵浦和駅まで別所排水路の上を「花と緑の散歩道」という散策路が整備されており、春は桜、梅雨にはアジサイ、秋には紅葉の見物客で賑わっている。関東大震災後に浦和画家と呼ばれる文化人や医師・官僚などが沼周辺に多数移り住み、県立浦和高校などに代表される文教都市浦和としての礎を築いたエリアとしても知られている。



意匠を凝らしたドア



入口



立原は夭折してしまったため、別所沼の畔にヒアシンスハウスの夢は実現しなかった。ヒアシンス・風信子という名の由来は、アポロンが戯れに投げた円盤に倒れた少年ヒュアキントスが血汐の中から生れ出て咲いた花と伝えられる神話に因んだものであるという。



奥が別所沼

---

**Back**

**Home**

「ことば／文芸」TOP へ戻る

「ホームページ」表紙へ戻る